

## J. デューイ 教育学的視点による造形教育研究

川路澄人\*・石野 眞\*\*

Sumito KAWAJI・Makoto ISHINO

A Study of Art Education through the J. Dewey's Educational Theory

### 1. はじめに

わが国の教育政策は欧米の教育思潮の影響のもとに形成され、現在、新たな展開を見せようとしている。川路澄人氏が一貫して取り組んでいる、芸術教育へのデューイ思想に基づいた教育学的視点の導入は、これまでの芸術特有の感性的側面ばかりからでなく、「知性」教育としてのアプローチを試みるものとして評価される。

石野は川路澄人が次の研究において、J. デューイの教育哲学を基盤とした造形・美術教育の理論的構築について、アメリカにおける新教育運動とマニュアル トレーニング論に着目して造形教育の基本理念をもとに芸術と教育の接点に創出される芸術教育の可能性について研究し、その歴史的展開と現代アメリカの美術教育思想におけるデューイの位置を考察している研究に注目し、従来の美術・芸術を中心とした感性的な側面からのみのアプローチというよりも、実際の生活に根ざした芸術の知性的な側面を加味した美術教育の教育学的研究に新たな方向性を示していることを思い、現在の初等教育における造形教育の理念とその指導方法について初等教育実践の場から具体的な子どもの姿を探るようなデューイ研究を進めてはどうかと提案し、ここに共同研究することになった。

- 論文1. J. デューイのマニュアル トレーニングに関する今日的解釈
- 論文2. J. デューイのマニュアル トレーニングに関する今日的解釈
- 論文3. J. デューイの教育における美的性質に関する研究
- 論文4. J. デューイの教育学的視点による考察—ものづくり教育再考—
- 論文6. デューイの学校教育論にみられる芸術教育の可能性
- 著書1. 「デザイン教育ダイナミズム」における—デューイの教育デザイン論

### 2. 研究の目的と教育現場の状況

本研究は教育実践の多様な形態を包括するデューイのマニュアル トレーニングの思想を実験・考察することにより、初等教育における造形教育の担当する領域の広さとその意義を提示することを目標としている。

川路の勤務する鹿児島市立錫山小学校は、鹿児島市南西部の山間地に位置し、市内唯一の僻地校であり、錫山中学校と校舎を共有する極小規模校である。小学生は17名（1年生3名、2年生6名、3年生2名、4年生2名、5年生1名、6年生3名）が在籍しており、3年次以上は複式学級の形態を取っている。川路は2年生6名の担任として本年4月より勤務している。

少人数、単式学級の特性として、児童一人一人に配慮する時間的・空間的余裕が挙げられる。実際絶えず6名の顔を見つめながらできる授業は児童の進捗、理解度、心理的状況の把握が大規模校に比してかなり可能である。また授業の進捗および時間割の組み換えなどその対応は教師と児童の関係においてかなりの融通が可能である。また児童同士の関係においても小・中9年間を同じ教室で過ごすことになり、かなり深い友人関係が構築される。学校を取り囲む環境としても保護者、地域の方々との交流が盛んで、学校と協力しながら子どもたちを見守る関係が続いている。

しかし必ずしも長所のみではなく、発想や意見の均質化、問題に対する対処の方法の狭相化、向上心の欠如、単調な人間関係による馴れ合いなど、長所に対応するだけの短所が存在する。

こうした教育環境の中において初等教育のより有効な教育手段は何であるかを実践・実証することが本研究の目的である。

そこで次章においてデューイのマニュアル トレーニング論を概括し、本実践の基盤を提示する。

\* 鹿児島市立錫山小学校

\*\* 島根大学教育学部 美術教育研究室

### 3. デューイのマニュアル トレーニング論

本研究はデューイのマニュアル トレーニング論をその思想的基盤に置いている。デューイの『学校と社会』において提示された作業学習の概念は学校の中心に知識の宝庫としての図書室を置き、その周囲に調理室、工作室などを配置することによって、経験とその裏付けとしての知識獲得を環境として成功できた。こうした作業学習（マニュアル トレーニング）には描画をはじめ、木工・金工・調理・裁縫・模型制作などが含まれていた。

しかしデューイのマニュアル トレーニング論は必ずしも「手と目の訓練」や技能の習熟と言った意味合いだけではなく、実際の「もの」に触れそれを操作することによって得られるさまざまな情報を学習・獲得すること、つまり感性と知性の有機的な関係のもとで行われる学習活動の形態なのである。デューイはこうした教育の在り方を「経験における社会的側面と個人的側面の相互作用」とまとめているが、それこそがマニュアル トレーニングの本来の姿と考える。

そしてデューイは以上のようなマニュアル トレーニングを次のように小学校において位置付けている。

「もし、これらの考えの中に何らかの真理が存在するとしたならば、学校で行われる構造的な作業、マニュアル トレーニングといった仕事の形態は、教育課程において中心的な位置に割り当てられなければならない。（中略）したがって、マニュアル トレーニングはその主な目的が生み出された実際的な結果や、製作者になるためへの技能の習熟によってでしかはかられないかぎり、小学校の教育課程において正当な位置に置かれることは決してできないであろう。」<sup>1)</sup>

この言葉が示すようにマニュアル トレーニングはその行為・経験の結果や習得した技能に重点を置くのではなく、その児童の経験の過程に繰り返され、積み重ねられた学習活動が重要なのである。

筆者はこうしたデューイのマニュアル トレーニング論を単なる感性の教育ではなく、感性と知性の共同作業としての学習の形態として認識している。

以上のような思想を背景にした教育実践を2例、次章で報告する。

### 4. 学習プロジェクト

今回の研究は第2学年における2つの学習プロジェクト<sup>2)</sup>を対象としている。第1プロジェクトは国語科との関連で、図工の時間に作成したゴミ袋を材料にした衣装

の活用であり、第2プロジェクトは生活科との関連で行った学習である。

#### 1) 第1プロジェクトの実際

第1プロジェクトは「身近な材料をもとに着るものを作ろう」という学習目標で行った授業である。

子ども達は材料の黒いゴミ袋を持ってくると透かして太陽を見たり、頭から被ってみたりと様々な行動を行った。

#### 材料

ゴミ袋 ハサミ カッター ポスカ 紙テープ

布テープ ガムテープ セロテープ 折り紙 その他

以上の材料で子ども達は自分達の衣装を作り始めた。かれらは1年次において「お楽しみ会」等の衣装作りを経験しており、今回の制作も今後の行事に生かせるようなものをつくろうとかれらは考えていた。

授業ではまず黒いゴミ袋に3カ所穴を開け、貫頭衣の要領で衣装の原型を作り、それにポスカを使って着彩した。（以下写真1～5を参照）

子ども達は着彩に飽きるとお面やバッグ、布テープを三つ網にしたベルトといった小物を制作し始めた。（写真を参照）この興味の移行は絵の具の乾燥を待つことに原因があったが、子どもたちの思考はより興味のあるものへと一時的に移った。それは新たな材料とのふれあいであり、身を飾るものとしての洋服から副製品へ思考が拡散して行ったのである。

この時間に制作された衣装はその後、「七夕集会」において、活用されるようになった。

「七夕集会」には各学級からレクリエーションとして出しものを準備することになっており、その話し合いの結果、子ども達は国語の教材「ふきのとう」を演技することとなった。かれらは4月に「ふきのとう」を学習し、その際紙芝居を制作し、配役を決めそれぞれの役を音読することの練習をしていた。またその成果を1年生に紙芝居を読み聞かせすることによって、発表した経験があった。

「七夕集会」においてかれらの中には前出の写真にある衣装を活用するもの、新たに作り直すものも様々であった。前回の衣装は全員保管してあったが、かれらは自分の配役に応じた衣装が必要となり新たに制作した。「ふきのとう」の配役は以下の通りである。

あらすじ（地の文）を読む役 ふきのとう

雪 竹 お日さま 春風

お日さまやふきのとうは衣装よりもお面やふきのとうの模型を作ることにした。春風と雪はそれぞれ透明なビニール袋を準備し、役に合わせた衣装を作った（雪はとけて水になるので透明な袋を選択し、春風は風の感じを出すために水色の紙テープを衣装に貼りつけた）。

衣装が完成するとそれぞれの台詞にあわせてどのような動きをするかの検討が始まった。

竹の風に揺れる姿や、目覚めた春風の吹き抜けて行く動き、お日様に照らされた雪が溶けて行く様子などを走る、転がる、震える、といった身体表現で表わそうとした。(写真6～7を参照)

教師の立場として子どもたちに指導・助言した点は材料の提示(透明なゴミ袋が欲しいという児童に材料を渡す)、つまぎきへの援助などである。こうした活動において子どもたちは自分の行う活動、その目的、手法をかなり明確に持っていたため、教師は時間と場を設けることに専心すればよかった。

## 2) 第2プロジェクトの実際

第2プロジェクトは4月当初の生活科における植物の成長という学習内容に対して次のような計画で学習を展開した。

第2学年において野菜の栽培は既に年間指導計画の中で決められていたため、学校近くの農協に野菜の種を買いに行くという学習から始まった。いろいろな種類の種の中から育ててみたい種を購入するとともに、それらを育てる場所の発見選択をさせた。今回は児童の保護者から畑を無料で借用できたことにより、学校の周辺に小さいながらも学級農園(約14㎡)を開設できた。教師も児童も実際に畑で野菜を栽培することは初体験であったが周りの協力を得ることによって実際には運営された。以下にこの農園栽培とそれに付随した形で行われた様々な造形・学習活動の記録を表1に示す。(学習計画を提示したいと思ったが、栽培は天候やその育成状況によって随時変更したので各教科間で調整した結果を示す。)

子どもたちは生活環境として田畑が近接しているため、農作業への抵抗はあまりない。彼らは生活科の学習から始まるこのプロジェクトにおいて次のようなさまざまな学習を行っている。自分の周りの社会環境について品物を購入するという活動で学習し、種を観察、スケッチすることにより見たものを表現すること、植物の成長を定規で計ることにより測定の技能を獲得するとともに、それを記録することにより成長に対する驚きを感じていた。収穫を喜び、そして調理することへの興味と関心(写真を参照)、そして収穫を来週にひかえたトウモロコシがタネキラしい動物に食べられてしまったことへの悔しさと、自分を囲む自然について学んだ。

収穫は子どもたちで食べるだけではなく、学校長、教頭、畑の地主などに感謝の気持ちとして子どもたちが分配した。また子どもでは調理しにくいものは給食技師に頼んで学校給食の材料として使ってもらい、全児童・生

| 日 時                      | 学 習 活 動 の 内 容                                    |
|--------------------------|--|
| 4/12                     | 農協へ野菜の種子を買いに行こう。                                 |
| 4/12                     | 種を観察しよう。(種のスケッチ)                                 |
| 4/14                     | 種を植える土を作ろう。                                      |
| 4/14                     | 種を植えよう。(苗造り)                                     |
| 4/21・26                  | 水かけと芽の観察をしよう。                                    |
| 4/28                     | 畑を耕そう。<br>(5/2に朝の水かけ当番を決める)                      |
| 5/12                     | 苗を植えかえよう。  |
| 5/19                     | 畑に水をかけよう。  |
| 5/24                     | 野菜の観察をしよう。                                       |
| 5/26<br>6/2・16・<br>27・30 | 野菜の長さをはかろう。<br>草とりをしよう。<br>肥料をあげよう。<br>花の観察をしよう。 |
| 6/27                     | なった実の数を数えよう。                                     |
| 6/27・30・<br>7/4・7・14     | 収穫をしよう。<br>(キュウリ、大根、ニンジン、ミニト<br>マト、かぼちゃ)         |
| 7/4                      | みんなで野菜を切ろう。                                      |
| 7/4                      | みんなで収穫したキュウリを食べよう。                               |
| 7/16                     | トウモロコシを食べたのーれ。                                   |

徒・職員で昼食として食べることもあった。子どもたちは自分たちの育てた野菜を自分自身、あるいは学校のみんと食べることによって食物に対する考えをさらに深めることができた。

収穫後は畑の思い出を作文にし、さらに秋植えの野菜の選択を始めた。そして作文には野菜を作ることの大変さ、成長する時間の長さ、食べたときの感想などさまざまな視点から書かれていた。

## 5. プロジェクトのまとめと評価

以上のような2つのプロジェクトは、単に図画工作科の合科的指導という目的で行ったものではない。

前述のようにマニュアル トレーニングという観点から現代の造形教育の在り方を模索した場合に必然的に生じた子どもの関心興味から派生した学習形態の例を提示したものである。

造形教育の本来の姿は主体的な意思による「もの」との関わりの中にあると考える。その表現手段、表現目的は様々であろうが、「造形」というものが教育という人為的・計画的活動においてどのような役割を担うかということが問題であって、造形(絵を描いたり、ものを作っ



1



4



2



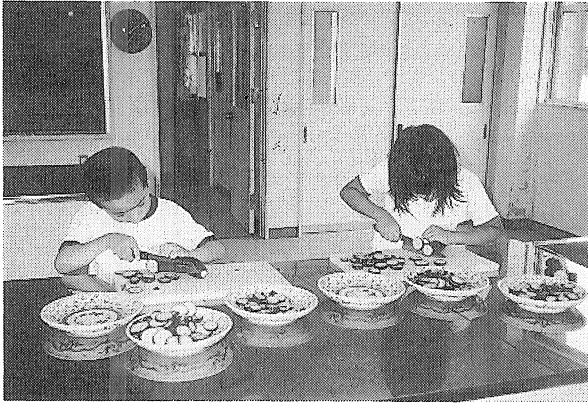
5



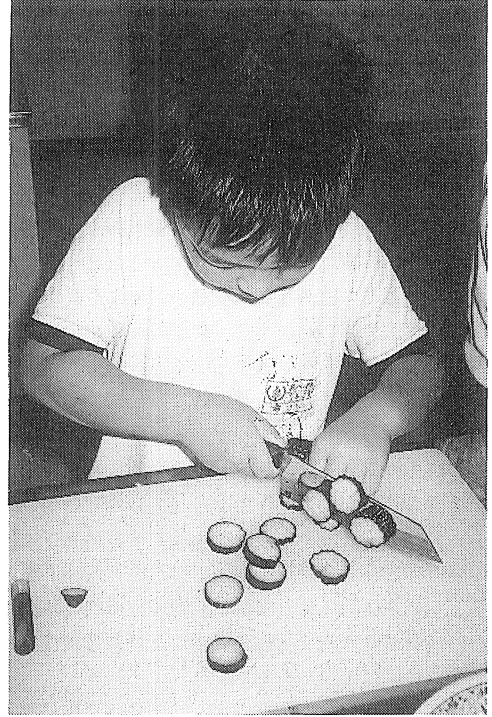
3



6



9



8

7



たりするということが教育されるというものではない。

また最大の問題点は本研究で提示したような学習形態が、極小規模校の特色として可能なかということであろう。当然市街地の学校、大規模校においては地理的、時間的な問題により、多くの問題を抱えていると考えられる。しかし本研究が基盤としているマニュアル トレーニングの思想は教師側の教材への取り組む姿勢であり、それぞれの実情にあわせた方法があると思われる。まして稚拙な筆者の実践などは模倣の対象にさえならない。学校の実情で述べたように小規模校の長所は短所でもあり、であるからこそ少数であることを肯定的に捉え、わが校でもそれぞれの教員が実践に励んでいる。

デューイのマニュアル トレーニング論は既に100年の年月を経ているが、前述した「経験における社会的側面と個人的側面の相互作用」としての思想は現代に通じるものがあると筆者は考えている。それはまさに学習指導要領に提示された基礎学力や自己教育力の問題である。子どもの主体的活動と学習の問題を有機的に結合させ、その基盤に造形的な活動を置くことは初等教育において非常に有用な手段である。

さらに付け加えるならばデューイは、こうした日々の生活の中に現出してくるさまざまな経験が質的な高まりを持つことによってそこに芸術が表出すると定義している。まさに芸術教育とは芸術の教育ではなく、教育が芸術と化していくものなのである。そしてその経験の質を高めることに造形的な活動（マニュアル トレーニング）が有用なのである。

#### 注

- 1) 杉浦美朗著、「デューイにおける活動的な諸仕事の研究」, 風間書房, 1981
- 2) プロジェクトとは教科領域にこだわることなく、学習活動が相互補完的に計画された「企て」の意味で川路が使用した。

#### 参考文献

- ・宮脇理著「工芸による教育の研究」建帛社, 1993
- ・デューイ著, 鈴木康司訳, 「経験としての芸術」春秋社, 1952
- ・デューイ著, 大浦猛編, 「実験学校の理論」明治図書, 1977
- ・G. ダイキューゼン, 三浦、石田訳「ジョン・デューイの生涯と思想」清水弘文堂, 1977
- ・大浦猛著「実験主義教育思想の成立過程」刀江書院
- ・「J.デューイのマニュアル トレーニングに関する今日的解釈」1990年3月・平成2年, 大学美術教育学会紀要第22号
- ・「J.デューイのマニュアル トレーニングに関する今日的解釈」1991年3月・平成3年, 美術教育学第12号
- ・「J.デューイの教育における美的性質に関する研究」1991年3月・平成3年, 日本美術教育研究紀要第24号
- ・「J.デューイの教育学的視点による考察—ものづくり教育再考—」1990年4月・平成3年, アート エデュケーション第3巻第2号通巻10号
- ・「J.デューイの造形的活動による教育に関する研究(1)」1991年12月・平成3年, 美術教育学第13号
- ・「J.デューイの学校教育論にみられる芸術教育の可能性」1992年3月・平成4年, 芸術教育学第4号
- ・「デューイの教育デザイン論」, デザイン教育ダイナミズム所収, 1993年3月・平成5年, 建帛社
- ・石野 眞著「デザイン・構成」第一法規, 昭和57年
- ・「美術・造形の基礎」大学美術・造形教育研究会, 産業図書, 昭和62年
- ・基礎造形シリーズ「芸術・デザインの平面構成」朝倉直巳著, 六耀社, 1984
- ・基礎造形シリーズ「芸術・デザインの立体構成」朝倉直巳著, 六耀社, 1992
- ・芸術研究報 9 筑波大学芸術学系研究報告第11号1989
- ・東京芸術大学紀要 1992